第１部　基調講演

「東アジア文化都市 2020 北九州」に向けて

北九州市長　　北橋健治

皆様、こんにちは。今日は、「東アジア文化都市」のタウンミーティングに、お忙しいところ、こうやってご来場いただきまして、本当にありがとうございました。

今日は、スペシャルゲストに日本舞踊家の藤間蘭黄さん、そしてまた、文化庁審議会委員の柴田英杞さんをはじめ、多くの方々にご臨席をいただいております。大変、光栄に思っております。

この「東アジア文化都市」は、まだまだ聞き慣れない言葉かもしれませんが、今、大変、日中韓で注目をされている事業であります。まず、どんな取り組みかを、ざっと見てまいりたいと思っております。

北九州市は、文化の非常に盛んな所だと思います。そこで、文化をどうやって振興するかということで、６年前に文化振興計画を作りました。その後、少子高齢化が進んでいきます社会の変化がありますし、アニメ、漫画、映画といったメディア芸術の面で、北九州市の取り組みが非常に注目され、評価を高めてまいりました。こういう変化に対応して、２年前に一部手直しをしたところでございます。

基本理念は、「市民の皆様が文化芸術を身近に感じ」ていただいて、そして、「市民自身が文化芸術を支えていくまち」を理念に掲げております。そしてまた、「シビックプライド」という言葉がありますが、我がまちに対する愛着と誇りを、子どもたちから年長者まで、もう一度大事にして、このまちをさらに元気にしていこうと、こういうことを盛り上げております。

「創造都市」という言葉が世界的に注目される言葉となっております。つまり、文化芸術によるまちづくりに取り組むということであります。文化芸術には、私たち一人一人を元気にする力があります。同時に、まちを元気にしていく力も期待をされております。文化芸術の持っている力を地域経済、そして教育、福祉などに生かしていこうと、そして創造的なまちづくりを進めよう。これが、創造都市の趣旨でございます。

さて、国がおこなった世論調査がございまして、グラフをご覧いただきますと、この青いほう、６割を越えている人たちは、これからは「心の豊かさが大事」だと答えています。また、３割の方は、まだまだ「物の豊かさを期待する」と、このような回答があるところであります。経済的な成長をとげてきた日本でありますが、成熟社会を迎えている一面、これからもっと心の豊かさを実感できる、そういう社会を期待される向きも強まっております。

さて、文化芸術のもたらす効果については、それぞれの地方で、いろいろな実践がおこなわれており、成功事例も私たちが耳にするところであります。香川県の瀬戸内の国際芸術祭は、約 12 億円の投資でありますが、実に 139 億円の経済効果があったといわれていま

す。２年前の来場者の数は約 104 万人になっております。次に、新潟県の越後妻有トリエンナーレであります。雪深いまちでありますが、ここの芸術祭も大きな経済効果を上げております。兵庫県の姫路城。ここも、改修されまして、入場者の数が一気に 280 万人になりました。そして、観覧料の収入も増えました。今、我がまちでは、小倉城の改修を一所懸命やっているところでございます。こうして見てくると、文化芸術というのは、地域経済の発展というポテンシャルを持っていることがわかります。

「創造都市」という言葉を聞かれて、まだ耳慣れないという方も多いかと思いますが、これは、都市政策の１つであります。ヨーロッパに行きますと、18 世紀から産業革命が起こりまして、著しい経済成長をとげたわけでございますが、その後、産業構造の変化が起こりまして、ところどころ、産業の空洞化とか、地域の荒廃が見られる所も出てまいりました。そういう所で、文化芸術の持つ力を見直して、それを創造性を生かして、地域の再活性化に取り組んでいるところが現れ、そしてまた素晴らしい成果を挙げていると。これが、今、世界的に評価されつつあるわけです。

事例ですが、フランスにナントという所があります。これは、フランス屈指の工業地帯でありましたが、1970 年代に港湾が他の都市に移りました。そして、造船業が衰退をして、経済が非常に悪化した所でございます。1990 年代になりまして、文化による都市再生へと舵を切ったのであります。そして、今、フランス国内でもっとも住みやすい都市といわれております。フランスの週刊紙に「ル・ポワン誌」というのがありまして、これまでに３度、フランスで一番という、このような評価を得たところでございます。

ナントにおきましては、例えば、ビスケット工場の跡を劇場・コンサートホール、ギャラリーの集まった文化センターに改修をしております。そこで、市民が参加しやすいプログラムをたくさん用意して、にぎわいを創出して成功しているといわれております。ナントに行きますと、地域密着の音楽祭が開催されているということです。北九州も芸術祭をずっと 30 年やっておるわけですが、ナントにおきましては、まちなかのさまざまな場所で、少し短い時間ではありますが、コンサートをたくさんやって、料金が安いのです。そして、市民が良質のクラシック音楽に気軽に触れられると、こういう場所を作ったわけでありまして、この音楽祭はパッケージにして海外に輸出をしていると聞いております。大盛況だということです。

また、大道芸というアートがありますけれども、ナントの大道芸は非常に有名でありまして、これは巨大な女の子の人形なんですが、まちの中を練り歩くシーンというのは、非常にインパクトになっていて、ロンドンや横浜にも、劇団が参加しているということであります。つまり、文化芸術によって、まちが元気になっているというところであります。

さて、東アジアの文化都市でございますが、このような欧州での創造都市の取り組みをアジアでも、日本でもできないかということがスタートであります。その提案が、今から６年前の日中韓文化大臣会合で出されまして、日本政府も一所懸命、文化庁を軸に取り組んできております。

2014 年の横浜市からスタートを致しました。毎年、日中韓で各国１つの都市を決めまして、３都市で連携をして盛り上げていくというプログラムであります。今年は、金沢、釜山、ハルビン市で開催中でありまして、本市の開催は７年目となります。

実は、コンテストがあり、この２年越しで手を上げて応募しまして、約 10 人くらいの

文化芸術の専門家が文化庁の会議室にお集まりになっていまして、そこでまずプレゼンを致します。そして、それぞれの委員から、矢継ぎ早にいろいろな質問が出て、多少うろたえたところもありましたけれども、しっかりと、北九州市の文化の素地といいますか、市民文化のこの熱さというものをプレゼンしたわけでございます。

実は、来年の開催でパスしようと思ったのですが、見事、東京都豊島区に破れました。「捲土重来」という言葉がありますが、もうラストチャンスは2020年はオリンピックイヤーでございますので、これにかけてきたのでありますけれども、幸い、今年の夏に文化庁を代表して、文化庁次長が北九州にお越しいただいて、2020年・オリンピックイヤーの文化都市は北九州に決定をしたということであります。この年には、日中韓の文化大臣会合が北九州で開催されるということです。開会式・閉会式は特に重視をされておりまして、世界標準になるような素晴らしいアーティストが北九州にお越しになるのではないかと聞いております。

さて、これまで、北九州市の強みをプレゼンなどで申し上げてきたのでありますが、まず、ロケーションであります。国際交流の実績があります。そして、先進的なアートシーンがあり、豊かな文化土壌があるとアピールをしてきたのであります。

例えば、国際交流でありますが、北九州市は、環境モデル都市・環境未来都市として海外からも評価をされておりまして、そうした市民の長年の活躍が評価をされて、２年前、Ｇ７先進国の首脳会議のエネルギー大臣会合が北九州市で開かれました。その時には、尺八、琴、弦楽室内合奏でお迎えをして、提灯大山笠だとか小倉織、また着物ファッションショーがおこなわれました。ジャパネスクの魅力を、北九州から力いっぱい発信したところであります。その年には、「ワンヘルス」という、世界の獣医師会・医師会の会合が日本で初めて誘致をされまして、大変活況を呈したところでございます。こういう国際会議の実績があります。

次に、文化の面では、日中韓の東アジアの文学フォーラムを成功させております。これは、８年前のことであります。日中韓の中にはノーベル文学賞に輝いた作家も含まれておりまして、たくさんの作家の方が一堂に会しました。また、国際音楽祭は1988年からずっと継続されております。また、博物館につきましては、日中韓の３都市の博物館が連携をして合同のイベントをおこなったりしております。ちなみに、つい最近でございますが、日本の愛される行ってみたい博物館のベスト５に選ばれたのは、北九州の「いのちのたび博物館」でございます。それから、国際漫画大賞。銀河鉄道999の松本さんをはじめとして、たくさんの漫画家・アーティストを輩出している北九州でございます。そして、ふるさとのために温かいエールを送っていただいておりまして、そういうご支援の下で、漫画で国際的なコンテスト・コンクールをおこなうようになりました。そういうことで、北九州の文化事業がだいぶん注目をされるようになりました。

また、メディア芸術のアートシーンでありますが、ポップカルチャーフェスティバルというものを、小倉駅の新幹線口を中心にずっと続けております。また、銀河鉄道999のモニュメントが駅にできましたし、そして、漫画家が一堂に会するビッグイベントがありまして、それを何とか北九州に誘致したいと、これまで汗をかいてまいりました。里中満智子先生をはじめとして、松本先生、多くの方のご理解をいただきまして、来年の秋、アジアの漫画家が一堂に会するという、「アジア漫画サミット」の開催が決定されました。

次に、映画のまちでございます。既に、北九州フィルムコミッションの実績として、映画・ドラマを100本以上制作しております。とにかく、映画ファンの方々が、ボランティアでエキストラになっていただくという、すごく大きなネットワークができております。フィルムコミッションは市役所の中にあるわけでございますが、そこに行ってみると、何か張ってあるそうであります。「我々、フィルムコミッションに不可能ということはない」と、こういうことを書いて、みんなで頑張ってきた成果なのであります。「HiGH&LOW」の映画のロケシーンもありますし、また、「相棒」の大掛かりなロケも北九州でおこなわれました。最近では、ハリウッド、タイ、韓流ドラマ、台湾、中国本土、こうしたところからも映画の製作陣が来て、作品が生まれております。これが、都市ブランドの向上、また地域への経済効果なども上がってきていると感じております。

次に、豊かな文化土壌でございますが、北九州芸術劇場を中心にしまして、劇場文化の創造、そしてまた合唱というのは、気軽に入れます。実に奥が深いわけでありますが、子どもから年長者まで、たくさんの方が、北九州では参加をされております。200 以上あるのではないかとも聞いております。そこで、合唱文化というのは、非常にまち全体を元気にする素晴らしい芸術だということで、私どもも、それを推奨しているわけでございます。また、アウトリーチ事業ということも取り組んでおります。これは、スポーツのアスリートもそうなのですが、有名なアーティストにお越しいただいたときには、学校現場にも出向いていただきまして、子どもたちにも、いい影響をいっぱい与えていただいております。

次に、日本遺産、ユネスコの遺産というものが、世界に誇れる地域の資源があるということをアピールしてまいりました。世界文化遺産は、官営八幡製鐵所の施設があり、そして、ユネスコの無形文化遺産として、戸畑祇園の提灯大山笠があります。そしてまた、下関と連携をして日本遺産に、「関門“ノスタルジック”海峡　～時の停車場、近代化の記憶～」ということで提案したところ、日本遺産に選んでいただきました。たくさんのクラシックな素晴らしい建物が残されております。

そうこうするうちに、平成 29 年度の文化庁長官表彰を初めていただきました。県内では唯一と聞いておりますが、文化芸術の創造都市部門で受賞しております。

また、市民の皆さんに文化にたくさん触れていただいて、参加を促していくために、いろいろな行事をおこなっております。毎年、市民文化賞の表彰式をおこなっております。また、リリーフランキーさんの「おでんくん」のこの有名な愛らしい絵でありますが、これをお借りして、「かるかるファンド」ということで、文化振興のファンドをつくっております。黒崎祇園・小倉祇園・若松みなと祭、伝統的な地域芸能というものを大事にしている地域であります。

特色ある文化施設は、磯崎新さんによる美術館があり、そしてまた、大変人気のある博物館があり、漫画ミュージアムがあります。そして、文学館、松本清張記念館、それから映画の「松永文庫」、芸術劇場、音楽の非常に響きの良い「響ホール」があり、ソレイユホール。2000 席の北部九州最大の劇場があります。

さて、「東アジア文化都市」の企画提案であります。その概要を皆様方にご紹介するわけでございます。まず、スケジュールのイメージであります。2019 年、来年の後半に、プレイベントを開催して「東アジア文化都市」のムードを盛り上げてまいります。市民の皆様方に広くＰＲをしていくわけであります。オリンピックイヤーの２月から３月に開会の

式典があり、11 月末から 12 月にかけて、閉会の式典を予定しております。式典には、中国･韓国の開催都市をお迎えします。3 か国の芸能ステージを繰り広げる予定であります。

また、集中的に文化イベントに取り組む期間をコアの期間と予定しておりまして、オリンピック・パラリンピックの時期に合わせ、インバウンドのお客様も大変多いかと思います。夏は、オリパラのウエルカムプログラム、また、秋の芸術シーズンには、東アジアの文化芸術で盛り上げる秋のコア期間というものを、プログラムを考えていこうとしております。この間に、文化大臣会合が北九州で開かれます。

次に、コア期間の事業を４つの柱として文化庁にアピールを致しました。まず、優れた日本伝統芸能をアジアへ発信するということが１つであります。それから、メディア芸術（映画や漫画・アニメ）をテーマとした国際イベントをおこなうということ。次にフォーラムという大きな実績のあります文学の面で、言葉の壁を越えた文学プログラムを企画してまいります。そして、「Art for SDGs」ということで、SDGs を表現するアートフェスティバルを考えております。ちなみに、SDGs は、持続可能な開発 17 の目標。国連のシンボルが 17 色のバッジでありますが、日本政府も一所懸命取り組んでおります。そして、北九州市は既に政府から、また、ＯＥＣＤから、アジアの日本のモデル都市として選定をしていただいております。このことは、目標の 17 をご覧いただきますと、住みよい社会をつくるということ、もっと豊かなまちをつくるということで、皆が納得のいく大事な目標だと思います。これで成果を挙げますと、内外から非常に注目をされまして、北九州市のさまざまな市民の活動、魅力というものが、発信をされていくことにつながるのではないか。そのことが、都市の大きな力になってくるのではないかと、そういうことで、SDGs を一所懸命やっているわけであります。

SDGs にはアートという項目がまだないわけでございますけれども、基本的には、こうしたアートと SDGs ということが､これからの北九州の大きな魅力の発信の原動力になるのではないか。そのように感じる昨今であります。

さて、夏のコア期間の事業であります。オリンピックイヤーの７月～８月であります。世界に誇れる日本や本市の伝統文化があります。その芸能の魅力を、国内外へ発信しようとするプログラムです。一般公募によって、子どもたちの夢舞台をつくっていきたいと考えます。また、全国トップクラスのアーティストを招いて、地元の文化活動者による新作の公演であります。インバウンド向けのプログラムも用意したいと考えております。

次に、秋のコア期間事業であります。10 月～11 月ごろ。ここにアジアメディア芸術祭を企画しているところです。アジア・世界の特に若い世代に向けまして、漫画・アニメ・映画などのメディア芸術を強力に発信するという内容で、ポップカルチャーフェスティバル、北九州フィルムフェスタ、北九州国際漫画大賞、こうしたイベントを計画しているところです。

次に、東アジアの文学会議であります。言葉の壁はありますけれども、それを何とか乗り越えて、文学プログラムを展開していきたい。文学館や松本清張記念館、こういう施設の活用も併せて考えていきたいと考えております。

この中では、例えば、パネルディスカッションを日中韓の作家・文学者でおこなうということもあるでしょうし、文学と音楽など、あるいは美術など、異分野とのコラボレーションの企画と、つまり言葉の壁を越えたプログラムも検討しているところです。

次に「東田アートフェスティバル for SDGs」についてであります。これは、文化庁から別途、美術館・博物館を核とした地域のクラスターづくりについて、我はと思う都市は手を挙げよということでありましたので、手を挙げました。「アートフェスティバル for SDGs」というネーミングで出したわけでございますが、この東田地域は官営八幡製鐵所の発祥の地でございます。かつて、公害でもっとも悩んだ地域であります。それが、劇的な再開発によって、新しい街並みへと進んでおります。スペースワールドが閉園となりましたけれども、ここに、新たな魅力ある、内外のお客様にお越しいただけるようなものを、今、準備をしているところであります。この美術館・博物館のクラスター支援事業を採択していただきましたので、まずは、市民の方を中心にした実行委員会を立ち上げまして、ここを文化的シンボリックなエリアと考えて、例えば、SDGs をテーマにした屋外でのアートフェスティバルの開催といったことを計画しているところであります。

次に、「東田アートフェスティバル for SDGs」に関連して、ニューヨークの国連本部に、今年７月に、日本の自治体として初めて発言の機会を与えていただきました。SDGs は 17 の目標があるわけでありますが、事前に、プレゼンの前に日本政府の関係者に、「自分の考えとして、18 番目にアートを加えてはどうですかという提案をしたいのですけれども、いかがなものでしょうか」と申し上げましたところ、「それはいいのではないか。自治体の思いとしてどうぞ」ということだったので、私から、「17 の目標に加えて、18 番目の目標にアートを加えること」を、そこで提案をさせていただきました。反応は、いまいちでございました。しかしながら、私の英語が下手だったのかもしれませんが、これは、諦めずに頑張っていきたい。

ともすれば、多くの方は、餓えだとか、あるいは貧困の克服だとか、いろいろなことが書いてありますので、昔のように発展途上国に対する経済協力・支援というイメージを思い浮かべる方もいると思うのですが、やはり、どんな国にも伝統の文化があります。民族音楽であったり、舞踊であったり、絵画、彫刻があります。それは、素晴らしいものがいっぱいあると思う。それを、お互いに、先進国も途上国も分け隔て無く、お互いにアートを認め合うという気持ちが、SDGs の達成に大事ではないかと、そんな思いであります。

従いまして、アートで人を豊かにするということは、同時に SDGs の達成にもつながるという、こういう私たちの思いが実現することを期待して、「創造都市・北九州」に取り組みたいわけであります。

あともうわずかな時間でございますが、その他のコア事業でございます。国際音楽祭は、伝統的な北九州の風物詩になっております。これをさらに盛り上げるということ。それから、市民の公募の劇団によりまして、東アジアの友好交流をテーマに、オリジナル作品の公演ができないかということです。20 は越えると思いますけれども、素晴らしい演劇活動が長らく北九州ではおこなわれておりますので、ぜひ、こうした東アジアの文化による友好交流につながるような、素晴らしい作品が公演できることを、期待を致しております。

それから、これは文化庁の幹部からも言われていることでありますが、「食」ということが非常に注目されております。日本といえば「食」と。食べるものが非常においしい。魅力があるということであります。これは、文化なんだということであります。多くの識者は「食文化は大事なんだ」ということです。そこで、この一連の東アジアの事業の中で、食文化をテーマにした祭典ができないかということを、これから検討を深めてまいります。

そして何よりも、障害者の方々のアートであります。既に、障害福祉団体の皆様によって、手作りの非常に魅力的なアートのフェスティバルが北九州でおこなわれているわけでございますが、ぜひ、この障害者の芸術祭というのを、東アジアに発信をしていければと、こんな思いであります。

これからは、青少年の交流事業というのが、ますます大事になってくると思います。特に、漫画・アニメは日本ならではの生活文化がありますので、そうしたことで国際交流を進めたい。

それと市民の企画事業でございます。今、ざっと申し上げましたけれども、市民全体で盛り上げる市民の一体感というのが大事でございますので、これから、いろいろなところで提案活動があると思います。それを、よく受け止めさせていただきまして、実際には実行委員会をつくって、それぞれの分野ごとに作業を進めると致しましても、市民の企画による事業についても、これからしっかりと検討してまいりたい。

結びに、「創造都市・北九州」の実現に向けまして、私どもは市制 55 周年でありますが、「文化のかおるまち」を目指して、皆が努力をして、大きな成果を挙げてきた土地であります。アジアに近いロケーション、国際交流の実績、非常にフレンドリーなアジアの都市との関係があります。豊かな文化土壌があり、先進的なアートシーンがあります。それを、どんどん大きくステップアップ致しまして、都市ブランドを発信していきたい。シビックプライドの醸成につなげていきたい。そして、文化芸術による国際交流の促進につなげていきたい。そして、文化創造都市としての成果を挙げたいということであります。

結びのこの漫画は、皆さんご記憶でしょうか。銀河鉄道 999 であります。「住みよいまちが見つかって良かったわね」「一緒に暮らそう。今度こそ」と。なかなかいい漫画でございます。「東アジア文化都市」にぴったりの漫画がここにあります。

ということであります。ご清聴ありがとうございました。